

随筆

米国駐在記

鈴木 一成

1. はじめに

私は入社以来、ピストンポンプやベーンポンプといった油圧ポンプ関連の業務に従事している。業務の一環では油圧ポンプの高性能化を図るべく解析を駆使して研究を進めているが、飛躍的なポンプ性能の向上を目指すためには、解析技術の高度化が必要不可欠である。高度化のためには従来の解析要素に加えて、より実現象に近づけるべく新たな解析モデル等を考慮しなければならないが、これに一から取り組むのでは多大な時間と費用を要する。

そこで最先端の解析技術を効率的に取り入れるため、2017年5月から2018年4月まで、油圧業界でトップレベルの技術を有する米国の大学へ派遣された。この話を聞いた当初は初めての海外赴任、しかも家族と離れて单身とのことで二の足を踏んでいたが、世界の最先端技術を学べる貴重な機会であることや、家族や周りの方々からの後押しがあり、赴任を決意するに至った。

本稿では赴任生活での体験談をいくつか紹介する。

2. 赴任

新たな生活への小さな期待と、生活や文化、言葉の壁といった大きな不安を抱えての赴任となったが、大学は幸運にもKYB Americas Corporation（以下KAC）まで車で行ける距離にあったため、駐在員の方々の多大な助力を受けることができ、言葉以外の大きな不安は早期に払拭することができた。一方、小さな期待であったアメリカでの学生生活はというと、大学の講堂で楽しく学生たちと勉学に励むイメージからはかけ離れ、実際は大学から車で30分ほど離れた研究施設に勤務し、毎日パソコンに向かって業務を淡々と進めるといった、非常にサラリーマンライクな生活スタイルであった。唯一、日本での環境と大きく違うのは人員構成であり、着任した職場は非常にワールドワイドな環境であった。中国やインド、ブラジル、ヨーロッパ各国と様々な国籍の

学生や企業からの派遣研究員が在籍し、アメリカ人は全体の20%程度しかいない。しかも頻繁に留学生や研究員が出入りするため、日本から来た私もその一人でしかなく、赴任当初から特別肩身の狭い思いをすることもないまま、すんなりと受け入れられた。研究所には私以外に日本人、ましてやKYBの社員などはおらず、自身の英語力も拙いため、交友関係の形成には苦勞するものと腹をくくっていたが、英語がうまく話せずとも意思疎通やコミュニケーションは取れるもので、あっという間に仲良くなることができた（写真1, 2）。しかし、これは学生たちから積極的に話しかけてくれたことが大きな要因になるのだが、後日談で私が学生よりも年下にみられていたことからの親切心であることがわかり、非常に



写真1 昼食会にて



写真2 遊園地にて

複雑な気持ちになったことを思い出す。アジア人は実年齢よりも若く見られるとは聞いていたが、私の場合は英語のたどたどしさも加わり、より幼く見えたのではないだろうかと考える。つまるところ、英語ができないが故に、より早く学生と仲良くなれたという皮肉な話である。

3. 大学での研究

当然ながら、大学では分からないことばかりであったため、必然的に先生や学生とのコミュニケーションが求められた。前述の通り、英語に自信のない私は質問用と回答用の文章を心の中で準備してから議論に臨むのだが、当然予想通りに会話が進むわけもなく、後半は勢いに任せて話すばかりであったところが、これが意外にも準備していた英語よりもしっかり伝わるものだった。最初は意味がよく伝わらなくても、一生懸命説明していると必死さが伝わるのか、相手も理解しようとして努めてくれて、最終的には会話が成り立ってしまう。このことは「正しい英語を話せないで議論などできない」という固定観念をもっていただいた私にとって驚きであった。おそらく日本人のほとんどは同じイメージをもたれているのではないだろうか。英語は万国共通の言語として主なコミュニケーションツールに用いられるが、思いがあれば筆談やジェスチャー、顔の表情などでも意思疎通ができることを知ることができたのは、研究の他、生活をする上でも非常に大きかった。ただし、これはFace to Face限定の話であり、プレゼンテーションなどの場ではリーディングやリスニングなどの英語力の大切さを改めて痛感したことも付け加えておく。

また、学生とコミュニケーションが取れるようになると様々な驚きがあった。そのひとつが学生のプロフェッショナル意識の高さである。学生はみんな自分の担当分野に誇りをもっており、分からないことを質問すれば懇切丁寧に問題解決まで導いてくれる頼もしい存在であった。その反面、担当分野以外の質問には一切答えようとしないうし、曖昧な回答さえもしてくれない。「それは彼（彼女）が担当の分野だ」と別の学生を紹介してくれるのみである。これには最初、薄情なものだと思ったが、時を重ねるにつれて印象が変わっていった。学生たちはお互いの技術を尊重しており、自分が発した言葉には責任をもっている。つまり、自分より優れた有識者がいる以上はその学生を差し置いて説明することは憚られるし、万が一自分が間違った情報を与えた場合に対しても責任を持たなければならないことを自覚しているのだ。それ故の発言なのだと思うと、一技術

者として非常に感銘を受けた。彼らにとっては至極当たり前の行動だったかもしれないが、技術への真摯な姿勢は私のマインドを変えるに十分であり、自分の担当する技術に対して、より高いプロフェッショナル意識をもって取り組んでいくと心に決めた出来事であった。

4. ビール

赴任して1ヶ月もすると大学生活にも馴染み、週末は学生と昼食に行ったり、お酒を飲みに行ったりするようになった（写真3）。初めて学生とお酒を飲みに行ったときには、日本とどう文化が違うのだろうか、と少し緊張したが、最初の一杯にビール以外を頼んだ学生に対して、「君はビールじゃないの？」と日本でもよくある冗談が繰り返されて思わず笑ってしまった。そのあとはその場にいたメンバーの国の言葉で「乾杯」し、みんな好き勝手しゃべって飲んでと、全く日本と変わらない雰囲気の中で親近感を覚えた。ちなみに一次会を出た後に「もう一軒行こう！」となったのだが、こちらも日本ではなじみ深い言葉である。

お酒繋がりとなるが、私自身、強くはないがお酒を飲むのが好きであり、特にビールには目が無い。アメリカのビールといえばバドワイザーを連想される方が多いかもしれないが、実はそれ以外にもアメリカではビールの種類が豊富にあつて（写真4）、見たことのない銘柄を探しては新しい味に挑戦したり、お店（写真5）で色々なビールを堪能するのがアメリカ生活の楽しみの一つであった。

一言でビールといっても味はもちろんのこと、アルコール濃度もまちまちであり、当たり外れの振れ幅も非常に大きい。アルコール濃度10%越えの強烈なビールに出会えたのもアメリカならではの良い思い出である。これらのビールの中でも私が特にお勧めしたいのが、赴任初日にKAC駐在員の方から教えて頂いたIPA（India Pale Ale）である。IPAはホップを大量に使用して作られたパールエールであり、口に含んだ瞬間のホップの香りや、苦みを含ん



写真3 夕食会にて

だ濃厚な後味はクセになるおいしさである。日本のビールにはないインパクトのある味であり、それ故に好みも分かれるので万人にお勧めできるわけではないが、ビールが好きな方、特に苦みに旨さを感じる方には是非一度お試し頂きたい。もうひとつ紹介したいのはブルームーンである。こちらは初めてアメリカを訪れたときにレストランの店員から勧められて飲んだビールであり、以降好んで口にするようになった。IPAとは対照的で、甘みを引き出すためにオレンジの果皮を用いているため、飲むと柑橘の香りや味がほのかに広がり、後味もすっきりしていて非常に飲みやすいのが特徴である。特にお店で注文すると、グラスにスライスオレンジが添えられて提供され、より一層フルーティーさが増し、その味を楽しめる。このためブルームーンはビール好きの方にはもちろんであるが、ビールが苦手という方にも是非お勧めしたい逸品である。



写真4 様々なビール



写真5 ビアホール

5. ダイエット

アメリカの代表的な料理といえばハンバーガーやステーキ、パッファローチキンウイング、フライドポテト（アメリカではフレンチフライと呼ばれる）などが挙げられるが、言わずもがな、これらは抜群においしい。もちろんビールに合うことは言うまでもない。しかし、このようなアメリカの食生活を満喫していると気になってくるのが、自分の体型である。

日本にいた頃から既に変わり始めていた体型であるが、アメリカに赴任して2ヶ月もしないうちに自分の体が加速的に変化していることに気がついた。今まで様々な言い訳をして逃げていた悲しい現実であるが、アメリカでは自分を納得させる言い訳が思いつかず、一念発起してダイエットに取り組んだ。

内容は至ってシンプルで、まずはジョギングから始めた。私が住んでいた町は閑静な田舎町で治安が良く、研究終わりに走っても全く問題ない。ジョギング初日は昔の自分の体のイメージに沿って颯爽と駆け出したが、15分もたたずに激しい息切れと眩暈に襲われた。いかに今の自分の体がイメージとかけ離れているかを思い知った。ところが人の体はよくできているもので、ジョギングの回数を重ねる度に徐々に走れる距離が延び、呼吸が楽になっていった。嫌々ながら始めたダイエットだったが、自分の体力が戻ってきた気になり、走ることに喜びを感じるようになってきた。そんなうちに体型にも変化が見られ始めると、もうダイエットが楽しくてしょうがない。ジョギングに加え、自宅やアパート内のジムで筋トレも始め、最終的には週にジョギング4日、筋トレ3日と毎日ダイエットに勤しむようになっていた。頑張りの甲斐あって無事にダイエットに成功し、10kg近くの脂肪をアメリカに置いて帰ることができたのである。しかし、環境とは恐ろしいもので、帰任して1年もたたないうちにその10kgは日本で補充されてしまったのだが。

ちなみにダイエットはいい事づくめであったわけではない。日本でもそうであるが、ジョギングというものは基本的に外で行うものであるため、予期せぬトラブルに遭遇する可能性がある。

本稿を読んでいるあなたは何かに追いかけられた経験があるだろうか。少なくとも私はこれまで経験がなかった。想像して頂きたい。あなたがアパート周りでジョギングをしていると、突然近所の飼い犬が家から飛び出してこちらへ向かってくる。その犬はあっという間に背後をとり、影のように張り付いてくる。あなたはいかにジョギングで取り戻した体力に自信があろうと逃げ切ることは難しいと悟るだろう。そのときあなたならどうするだろうか。私の場合、覚悟を決めて一番痛みが少ないであろう臀部を差し出した。そして訪れる痛み、飛び上がる私、振り返ると大笑いしている飼い主…。その光景を見た人々にとっては、まるで漫画の一コマのようであったらう。

想像して頂きたい。池の周りをジョギングしていると、畔で一組の兄弟が遊んでいる。仲睦まじいその姿は微笑ましく、あなたはなんの警戒もせずに近

くを走り抜けようとする。その矢先、目に飛び込んでくるのは弟の手に持たれた1m近くあろう大きな魚。既に魚は死んでおり、枝に突き刺されたその姿は悪い予感を告げるに足るものである。しかし、それに気付いたときにはあなたも兄弟から見つかり、兄弟は興奮しながら池で魚を見つけた話をしようと近づいてくる。そのときあなたならどうするだろうか。私の場合、身の危険を感じて後ずさりをしたのだが、この判断が間違いであった。その後待ち受けていた運命は皆さんのご想像通りである。

犬と子供は逃げるものを追いかける習性があるらしい。このような特異な経験も私にとってはアメリカ生活を思い出さうえで欠かせないものであり、思い出を彩る大切なピースである。

6. 旅行

フルードパワー国際会議に参加するため、フロリダ州を訪れる機会があり、せっかくなので土日を利用して観光した。フロリダ州はウォルト・ディズニーマニッシュリゾートやユニバーサル・オーランド・リゾートなどのテーマパークから美しいビーチ、ケネディ宇宙センターなどがあり、アメリカでも有数の観光地である。その中で私が訪れたのはキーウエストである。キーウエストはアメリカ最南端の島で、フロリダ半島から車で3～4時間ほど走った先にある。街並みは色鮮やかで、南国のような雰囲気が漂う。街にはサザンモストポイント（アメリカ最南端を表すマーク）やキーウエスト灯台、ノーベル文学賞を受賞したアーネスト・ヘミングウェイが暮らしていた家（現在は博物館として公開、写真6）などがあり、マリンスポーツなどもできる。しかし、本当の目的はその道中にある。フロリダ半島からキーウエストまでは島々を繋ぐ橋が架かっており、最長の橋はセブンマイルブリッジと呼ばれ（写真7）、その名の通り全長約7マイル（約11km）ある。海の上に架けられた橋から見える景観は、見渡す限りのエメラルドの海がその果てで空と交わり、映画やCMにも使われるほどの絶景なのである。訪れた時期が大

型ハリケーン「イルマ」の直撃後だったため、その傷痕はまだところどころ残っていたが、それでも日本ではお目にかかることのできない風景に感動した。アメリカに来てよかったと思えた瞬間であった。



写真6 ヘミングウェイの家



写真7 セブンマイルブリッジ

7. おわりに

今回の海外派遣は社内でも前例がなく、右も左も分からないまま、ただ懸命に一日一日を過ごす日々だったが、非常に有意義な経験であった。思い返すと、得たものは数えきれないほどあるが、自分の力だけで成し得たことは数えるほどしかないと感じる。ご指導、ご協力を頂いた大学の先生や学生、親身になってサポートしてくれたKAC駐在員の方々、このような機会を与えてくれた関係者各位に、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

著者



鈴木 一成

2008年入社。技術本部基盤技術研究所要素技術研究室。油圧ポンプの研究開発ならびに振動騒音関連業務に従事。